

# COPD 患者の食事摂取量増加に 対する取り組み

園田 恵

(株式会社 LEOC (前所属：社会医療法人アルデバラン 手稲いなづみ病院 診療技術部 栄養科))

## 【目的】

慢性閉塞性肺疾患（以下COPD）患者は代謝亢進に伴い、安静時エネルギー消費量が有意に増大するが、倦怠感、呼吸困難感に伴い食事を十分に摂取できないことが多い。これが長期化すると、体タンパクの異化が起こり、呼吸困難感が増強し、ADLにも悪影響を及ぼす。

当院入院のCOPD患者でも同様のケースがみられ、今回はそれに対して取り組んだ内容について報告する。

## 【実施内容】

問題点として、他職種間に食事を摂取していればそれで良い、という認識があった。さらに、管理栄養士の在籍人数が1人であるため、自ら情報を取りに行かないと必要栄養量が満たされないままであった。これらに対し、まず他職種への積極的なコミュニケーション（状況確認、相談、提案）を短時間かつ頻回にとった。電子カルテでの情報収集や食事時の訪室、リハビリを見学した。

## 【実施期間】

2019年2月～2020年2月

## 【結果および考察】

積極的なコミュニケーションや電子カルテの活用に伴い、実施前と比べて他職種から情報が得られるようになり、スピード感のある栄養サポートが可能となった。

エネルギー摂取量は、入院時1300kcal/dayであったが、食形態の変更や義歯の調整をきっかけに徐々に増加し、233病日目から病院食のみで約1900kcal/dayとなった。医師に指示を仰ぎ、当院で初めてCOPD患者への栄養指導を実施した。タンパク質摂取量もエネルギー摂取量の増加に伴い、入院時58g/dayから233病日目以降は67g/dayまで増加した。体重は入院時43kgから翌月41.1kgに減少したものの、その後は徐々に増加し、363病日目には52.4kgまで増加した。%AMCは入院時74.9から339病日目からは85.3へ増加した。ADLは入院時ほぼ臥床状態であったが、徐々にトイレ使用可、見守り歩行、自立歩行ができるまでに回復した。

以上より、積極的にコミュニケーションをとることで多職種協働へとつながり、COPD患者の食事摂取量が増え、筋肉量の増加及びADLの改善に寄与したことが示唆された。